



法の水茎

大正大学講師 高橋 秀城

(70)

桜を散らす春風は寒くないけれど、空に知られることのない桜木の下には、花びらの雪が降っているよ。

桜散る
木の下の風は
寒からで
空に知られぬ
雪ぞ降りける
（貫之集）

今年（ことし）は例年（れいねん）よりも桜の開花（かいけ）が早（はや）かったよう（よう）です。この「高尾山報（たかおさんぽう）」が届（とど）く頃（ころ）には、高尾山（たかおさん）の桜（さくら）も満開（まんがい）から、散（ち）り始（はじ）め、桜吹雪（さくらふぶき）へと季節（きせつ）が移（うつ）るついで（ついで）の（の）かもし（も）れませ（せ）ん。

冒頭（まうとう）の歌（うた）では、雪（ゆき）のよ（よ）うな桜（さくら）の花（はな）びら（ら）がハラハラと舞（ま）い散（ち）つ（つ）てい（い）ます。「空（そら）に知（し）られぬ」とある



花まつりでは、生まれたてのお釈迦様のお姿に甘茶を灌いでお誕生をお祝いする

ように、高い空からは地上の様子が見通せないほど、満開に咲き誇っているの（の）でし（し）ょう。

「下風」とは「草木の下を吹き抜ける風」のことです。もしかすると地面に仰向けに寝そべりながら、薄紅色の桜の空を眺（なが）めているのでし（し）ょうか。

鶯（うぐいす）をはじめとする春鳥（はるどり）たちの囀（さえず）りに耳（みみ）を傾（か）けながら、暖（ぬく）かな春風（はるかぜ）に身を任（まか）せる花（はな）びら（ら）のよう（よう）に、穏（おだ）やかな時（とき）がゆ（ゆ）つたりと流（なが）れてい（い）きます。

四月（しがつ）八日（やっぴつ）には、お釈迦様（しあきさま）の誕生（たんじゆん）を祝（いわ）う「灌仏会（くわんぶつえ）」（花祭（はなまつり））が営（営）まれます（た）。「高尾山（たかおさん）山（やま）院（いん）では仏舎利（ぶつせり）塔（た）において、さまざま（さまざま）な春（はる）の草花（くさな）を飾（か）り付（つ）けた花（はな）御堂（ごだう）（小さなお祭（まつり））の中（なか）で、生まれたてのお釈迦様（しあきさま）のお姿（おすがた）に甘茶（あまぢ）（香水）を灌（くわん）いでお祝（いわ）います。

世（よ）の中（なか）に
今日（けふ）ぞ仏（ぶつ）の
立ち出（だ）でて
あらはれたまふ
水（みづ）は汲（くみ）みける

（「顕輔集」）
「私（わたくし）たちが生（な）きているこの世（よ）の中（なか）に、お釈迦様（しあきさま）が今日（けふ）お立（た）ちにな（な）られた。こ（こ）うして今（いま）、空（そら）から降（ふ）り注（つ）ぐ甘露（くわんろ）の水（みづ）を汲（くみ）むこと（こと）の有（あ）り難（がた）さよ。」

中世（ちゆうせい）の「太平記（たいへいぎ）」という軍記物語（ぐんきものがたり）には、灌仏会（くわんぶつえ）の日は「信心（しんじん）のある者（もの）も無（な）い者（もの）も、灌仏（くわんぶつ）の水（みづ）に心を浄（じやう）め、花（はな）を供（く）えて香（か）を焚（たき）、お経（きやう）を唱（な）えながら、悪心（あくしん）を捨て（すて）て善心（ぜんしん）を修（しゆ）める日（ひ）」と記（き）されてい（い）ます。

お釈迦様（しあきさま）をお慕（たの）む香（か）水（すい）を汲（くみ）むこと（こと）によ（よ）つて、自（みづか）身の心（こゝろ）も洗（あら）い浄（じやう）められ、今（いま）まで見（み）えなかつた仏（ぶつ）様（さま）との結（むす）び付（つ）き（因縁（いんげん））を感じ（か）じる心（こゝろ）も現（あ）われてくるのでし（し）ょう。

思（おも）えば、こ（こ）うした春（はる）の息吹（いきぶ）いを感じ（か）じられるのも、お釈迦様（しあきさま）の誕生（たんじゆん）日（ひ）を毎年（まいねん）のよう（よう）に祝（いわ）いできるのも、こ（こ）の世（よ）に「人（ひと）」として生（な）を享（た）げたから（か）らに他（た）な（な）りませ（せ）ん。命（いのち）があるからこそ、日（ひ）々の経（きやう）験（げん）から、喜（き）びや怒（いかで）り、悲（かな）しみや楽（たの）しみなどの感情（かんじやう）が生まれ

てくるのでし（し）ょう。

仏教（ぶつぎやう）では、私（わたくし）たちが住（す）む世界（せかい）を「人道（にんどう）」（人界（じんがい））と呼（よ）びます。人（ひと）として生（な）まれること（こと）ができるのは「梵（ぼん）天（てん）海（かい）針（しん）」（天上界（てんじやうがい））（梵（ぼん）天（てん））から垂（た）り下（くだ）した糸（いと）が、海底（かいぞう）の針（し）の穴（あな）に通（とほ）るよう（よう）な（な）もの（もの）と喩（たと）えられ、人（ひと）道（みち）に生（な）まれること（こと）も、仏（ぶつ）の教（きやう）えに廻（まわ）り合（あ）うこと（こと）も、極（ごく）めて稀（まれ）なこと（こと）と説（と）きま

では、私（わたくし）たちは人（ひと）となる前（まへ）はど（ど）こに身（み）を置（お）いていたのでし（し）ょうか。残念（ざんねん）ながらと申（まを）すべ（べ）きか、前世（ぜんせい）での記憶（きおく）は残（のこ）されてい（い）ません。ただ「三途（さんず）の故郷（こきやう）」という言葉（ことば）があるよう（よう）に、私（わたくし）などは六道（りくだう）の中（なか）でも地獄道（ぢごくみち）・餓鬼道（がきみち）・畜生道（ちくじやうみち）といった三悪道（さんあくみち）に慣（な）れ親（おや）しんでいた身（み）かもしれませ（せ）ん。たまたま人（ひと）道（みち）に生（な）まれたから（か）らには、仏道（ぶつだう）という新（あたら）しい「道（みち）」をひたすらに歩（あ）みたいと思（おも）つてい（い）ます。

これ（こ）れまで数（た）多（た）の先達（せんたつ）（仏道（ぶつだう）修行（しゆぎやう）の先輩（せんぱい））が、仏（ぶつ）の道（みち）を追（お）い求（もと）めてきま

折り折りの記 (104)

波多野 重雄

富士山をのせる高尾の山桜

高尾山（たかおさん）の春（はる）は麓（ふもと）から染井（せんゐ）吉野（よしの）が咲（さ）き初（はじ）める。春（はる）はあけぼのから暮（く）れるまで、又（また）、時雨（ときり）、朧（おろ）と氣象（きさう）の变化（へんか）に人（ひと）はときめき、山（やま）を花（はな）一（いっ）色（しき）につつま込み、そして鳥（とり）の囀（さえず）りをききながら登山（とんざん）者（しや）は遊山（ゆうざん）を楽（たの）しむ。小鳥（こどり）らと一緒（いっしょ）に一（いっ）望（ぼう）千里（せんり）の高尾山（たかおさん）頂（たか）につくと、山桜（やまざくら）の大木（おおいき）が風（かぜ）に大（お）きく揺（ゆ）れてい（い）る。さながら春（はる）を喜（よろこ）ぶよう（よう）に山桜（やまざくら）の大木（おおいき）が、真（ま）白（しろ）な富士山（ふじさん）を乗（の）せてそ（そ）よいでい（い）る。「桜（さくら）に富士（ふじ）」なんと美（うつく）しい光景（ひかりげい）だろ（だろ）う。暫（しばらく）し富士（ふじ）を乗（の）せ、揺（ゆ）れる山桜（やまざくら）に見（み）惚（ぼ）れる。

（高尾山健康登山の会々々）

青 溪

安房（あな）の地（ぢ）に

厚木市 荒井 一雄

早朝入深山
閑澗燕鶯喋
鳶降捕川魚
飛去隱密葉

早朝（そうちゆう）、深山（みやま）（南房総・養老溪谷）に
閑澗（かんかん）（静（しず）かなる溪谷（せきこ））に燕（つばき）・鶯（うぐいす）の
合掌（あがて）がたまたま…
鳶（とび）が急降（きゆうかう）下（くだ）して川魚（かわいし）を捕（と）へ、
密葉（みつえつ）（生（な）ひ茂（も）れる青葉（あおは））に隠（かく）る…

した。中には、次のような話も伝わっています。

昔（むかし）、河内（かふち）国（くに）若江（わかゑ）郡（ごほ）の遊宜村（ゆうぎむら）（今（いま）の大阪府（おさかふ）八尾市（やしろし）八尾木（やしろき））に、修行（しゆぎやう）を積（た）んだ尼僧（にじゆう）がいました。この世（よ）で受（う）けた恩（おん）に報（むか）ひるために仏像（ぶつざう）を描（え）き、その絵（え）に六道（りくだう）も描（え）き込んで寺（てら）に安置（あんじ）しました。

ところがある日（ひ）、留守（くす）守（まも）り中（なか）にこの絵像（えざう）が盗（ぬす）まれてしま（い）います。悲（かな）しみに暮（く）れながら探（たず）ねましたが見（み）つかりませ（せ）ん。そこで今（いま）度は、放生会（はうじやうかい）（不殺生（ふせつじやう）の教（きやう）えを守（まも）って鳥獸（ちゆうじゆう）や魚（いし）を放（はな）つこと）を思（おも）い立ち市場（いちば）に出（で）かけました。

ふと見（み）ると、樹（き）に掛（か）けてあつた背負（せお）い籠（かご）から、いろいろな生き物の鳴（な）き声（こゑ）が聞（き）こえてきます。放生（はうじやう）のために買（か）つて放（はな）してやろうと思（おも）い、持（も）ち主（しゅ）に交渉（かうわう）しますが売（う）りたくれませ（せ）ん。猶（なほ）も食（た）い下（くだ）がると、持（も）ち主（しゅ）は籠（かご）を捨（す）てて逃（に）げてしま（い）いました。

さつそく籠（かご）を開（ひ）けてみると、中（なか）には盗（ぬす）まれた仏（ぶつ）の絵像（えざう）が入（い）つていま（いま）した。



咲きほこる桜もやがて散り、季節が移ろう

尼僧（にじゆう）は、喜（き）び、涙（なみだ）を流（なが）し、泣（な）き恋（こ）しがります。「ああ、嬉（うれ）しい」と言（い）うと、全（ぜん）ての生き物（いきもの）の幸（さい）せを心（こゝろ）から祈（いの）ったのでした。

（『日本霊異記』）

尼僧（にじゆう）さんは人（ひと）として生（な）まれ、仏（ぶつ）の道（みち）を歩（あ）みつつ、畜生道（ちくじやうみち）など自然（しぜん）への慈（あはれ）しみの心（こゝろ）も忘れ（わす）れませ（せ）んでした。だからこそ、絵像（えざう）の在（あ）り処（ところ）を教（き）えてくれたので

しょう。「思（おも）えば思（おも）われる」と言（い）われるように、仏（ぶつ）様（さま）もこの世（よ）のあらゆる生き物（いきもの）も、尼僧（にじゆう）さんの人（ひと）生（な）を応（おこ）援（えん）していま（いま）す。

私（わたくし）たちは人（ひと）として命（いのち）を授（たま）かりました。得（え）がたい我（わが）が身（み）を慈（あはれ）しみ、心地（こゝろ）良（よ）い春（はる）の野道（のちみち）を行（い）くよう（よう）に、心（こゝろ）を乱（みだ）さず生（な）きてい（い）きたいのでし（し）ょう。

（栃木（とちぎ）北部（ほくぶ）教区（きやうく）普濟（ふじ）寺（てら））